

・本冊子は二〇二二年四月から二〇二三年四月まで「高山市民時報」紙に連載されたミニ法話「響」から一部を選び冊子化したものです。

目次

人生の豊かさ	四衢 亮 (不遠寺住職)	2
寄り添うひとりと	窪田 美幸 (圓徳寺坊守)	5
私は何者か	夏野 了 (満成寺住職)	8
春告鳥と如来の御催促	渡邊 侑希 (了因寺住職)	11
「向こう」で酌み交わすお酒	細川 宗徳 (蓮乗寺住職)	14
お内仏を通じて	岩崎 正親 (正覺寺住職)	17
辛くたって、悔いがない	内記 洸 (徃還寺副住職)	20
秋を感じて思った事	白尾 匡 (長圓寺住職)	23
命日・明日・迷日	三島 多聞 (高山別院輪番)	26

人生の豊かさ

四衢 よつじ 亮 あきら
(不遠寺住職)

『イノチのつぶやき——こどもとおとなへの4つの質問』という可愛
い本があります。その中で「自分が大切にされた体験で記憶に残って
いることはどんなことですか」という質問に、小学校の低学年の子が
こんなふうに答えています。

「おそくかえっているあいだに、ぼくをさがしてた」。夕闇がせま
り心細くなって気持ちが悪くて家へ急ぐ中、帰ってこない自分を探し
ているお母さんお父さんにばったり出会ったのです。名前を呼ばれ、
「遅くなったね」と声をかけられ抱いてもらい、心配しあちこち探し
回ってくれた親の暖かさを感じ、大事にされていたことを知ったので
す。

独りぼっちだと感じて、闇に押し包まれる不安の中にいるとき、自分の名前を呼ばれ、「お母さんよ、お父さんだよ」と声をかけてくれる。「名」という文字は、夕方の夕と声を発する口が合わさった文字です。夕闇の中で、はっきり見えないとき、そこに名を呼び、名乗ってここにいるよと知らせる、それが名の形です。

同じ質問へのおとなの答え、「自殺しようとして、できなくて、帰ってきたとき、友だちが泣いてくれたこと」。死ななかつたことに何よりも安堵して、その死にたいほどの辛さや苦しみを一緒に泣いてくれる友だち。辛さや苦しさを悲しみ分かち合ってくれる友の存在が、私たちが生きる支えです。

うまくいっている時や上り調子の時は、近寄って大事にしてくれども、つまづき失敗すると、離れていくのは、友だちではないでしょう。辛さや苦しさに沈むときにこそ、決して見捨てず名を呼びかけ、そば

にいて寄り添い、悲しみを分かち合い、一緒に歩みを開いてくれる友。
そんな存在を『涅槃経』^{ねはんぎょう}は善友^{ぜんぬ}と言います。

善友になれというのではありません。これまでも色んな人や出来事が善友となつて、私に呼びかけ寄り添ってくれていないだろうか。それに気づくことができること、それが人生の豊かさだと教えています。



寄り添うひとりと

窪田くぼた

美幸みゆき

(圓徳寺坊守)

小学生の頃、私は一部の同級生からいじめを受けていました。身体の特徴をからかわれ、無視され、避けられ、なぜこんな目に遭わなければならぬのかと毎日憂鬱ゆううつでした。

遅くまで勤めてくる両親に話すと心配させてしまうので、色んな理由をつけては何も問題がないふりをしました。それでも学校へ行けていたのは、ごく少数の友達が存在があったからです。変わらず接してくれる友達が、何よりも私の救いでした。

中学校に進学すると学区の関係で生徒も分散し、私がいじめを受けることはなくなりました。同級生のS君が男子学生数名から、毎日プロレスの技をかけられる側でいることに気も留めぬまま、あつという